

歴史的事象を多面的に関連付ける力を育成する中学校社会科学学習指導の工夫 — 様々な事象と文化的な事象とをつなぐマッピングを取り入れた学習を通して —

三次市立十日市中学校 辻坊 健作

研究の要約

本研究は、歴史的事象を多面的に関連付ける力を育成する学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、歴史的事象は実際に見ることができないため、事象を様々な視点から多面的に関連付けて見いだす必要があることが分かった。そこで、本研究では、歴史的事象を多面的に関連付ける力について、様々な事象から捉えた理論や法則と特定の事象とをつなぐことによって、その時代の特色を見いだす力であるとした。特に、この時代の文化の特色を捉えるために、国際的な視野を含む幅広い角度から考えさせる必要があるため、思考の過程を視覚化できるマッピングを取り入れた研究授業を行った。その結果、政治や経済などの理論や法則と文化的な事象とをつないで、文化の特色を見いだすことができた。このことから、マッピングを取り入れた学習は、歴史的事象を多面的に関連付ける力の育成に有効であることが明らかになった。

キーワード：多面的に関連付ける マッピング

I 主題設定の理由

中央教育審議会答申（平成20年）社会科、地理歴史科、公民科の改善の基本方針では、社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視する観点から、「社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し、」¹⁾と示された。これを受けて、中学校学習指導要領解説社会編（平成20年、以下「解説」とする。）では、「歴史的事象を一面的にとらえるのではなく、様々な角度から考察し公正に判断する」²⁾ことが大切であると述べられている。また、文化の学習についても、「我が国や郷土の伝統と文化の特色を、国際的な視野を含む幅広い角度から考えさせ、それを継承することが大切である」³⁾と述べられている。これらのことから、文化の学習においても、生徒が単元を通して学習した様々な事象と文化的な事象とを多面的に関連付けることが求められていると考える。

特定の課題に関する調査の分析（平成20年）では、文化遺産などの学習は、我が国の歴史の大きな流れと各時代の特色を理解するために必要なものであるとして、文化の学習の重要性を述べている。しかし、文化に関する問題について、「説明文から用語を選択する問題」よりも、「用語から説明文を選択する問題」の通過率の平均が16.7%低く、文化に関する歴史的事象を関連付けて特色を理解することに課題がみられる。そのため、文化の学習において、各時代の文化が政治、社会などの動向と関連していること

を踏まえ、生徒が単元を通して学習した様々な事象と文化的な事象とを多面的に関連付ける学習を取り入れることで、時代の特色の理解を深めさせる必要がある。

そこで、本研究では、単元のまとめにおいて、政治、経済、国際社会の視点をつくるために、生徒に、マップ上で様々な事象をカテゴリーにまとめさせながら、時代の特色を見いださせる。次に、見いだした時代の特色と文化的な事象とをつなぐことによって、文化の特色を説明させる。単元のまとめにおいて、こうした学習を取り入れることにより、学習した様々な事象と文化的な事象とを多面的に関連付ける力を育成することができると考え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 歴史的事象を多面的に関連付ける力について

(1) 関連付ける力とは

「関連付ける」ことについて、森分孝治（1984）は、社会的事象を構成する事実は無数にあり、それら相互の関連付けは多様にできるとし、その中からどの事実や事実関係を重視するかは、観点によって異なると述べている⁽¹⁾。また、「関連付ける」対象となる知識を明らかにするため、社会科授業における

社会認識形成の在り方の探求を通して、社会的事象に関する知識の構造を考察している。この知識の構造について、社会科の授業における、生徒の主観的知識を成長させる客観的知識の構造を、図1のように示している。

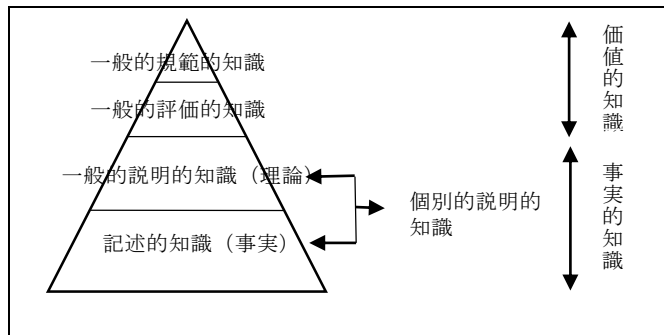


図1 客観的知識の構造図⁽²⁾

社会的事象に関する知識は、事象を記述し説明する事実的知識と、事象に対する態度・行動を表明し指示する価値的知識に分類される。さらに、事実的知識は記述的知識、個別的説明的知識、一般的説明的知識の三つに分類される。記述的知識とは、時間的空間的に限定された特殊な社会的事象や過程を記述した知識であり、個別的説明的知識とは、特定の社会的事象の起因や結果、影響を説明し予測する知識である。さらに、一般的説明的知識とは、一般的な社会的事象の事実を説明する理論や法則となる知識である。二つ以上の記述的知識を、一般的説明的知識を根拠として推理し結び付けたものが個別的説明的知識であるため、この個別的説明的知識が、社会的事象の認識活動で中心となる知識であると考えられる⁽³⁾。

具体的に「奈良時代の政治」の例を挙げて説明する。ここでは、「聖武天皇は自ら政治をとり行った」「聖武天皇が奈良の東大寺に大仏をつくらせた」「奈良時代は疫病や天災、権力争いなどで、国の政治が安定しなかった」という三つの記述的知識が考えられる。この三つの記述的知識は「宗教の権威をもって国の政治を安定させる」という一般的な社会的事象の事実を説明する一般的説明的知識を根拠にして関連付けることによって、「聖武天皇は仏教の力をもって、奈良時代の政治を安定させようとした」という個別的説明的知識が導き出されることになる。

このことから、個別的説明的知識は、記述的知識と一般的説明的知識とを関連付けることによって見いだすことができると考える。

そこで、本研究において、関連付ける力とは、複

数の記述的知識を一般的説明的知識である理論や法則を根拠として結び付け、個別的説明的知識を見いだす力であると定義する。

(2) 歴史的事象を多面的に関連付ける力とは

ア 「多面的」とは

「多面的」について、「解説」では、『多面的』とは学習対象としている社会的事象が様々な面をもっていること⁽⁴⁾を意味していると述べられている。

大杉昭英（2000）は、社会的事象は様々な側面をもっており、その社会的事象相互が複雑に関連し合っていることなどの特徴をもっていることから、生徒自身が様々な角度から見ていくことが必要であるとしている⁽⁴⁾。さらに、社会的事象を捉える見方や考え方を、図2のように示し、『見方や考え方』＝『概念的な枠組み』を『レンズ』とし、『光源』を生徒の分かりたい、あるいは知りたいという意欲と考えるのである。そして混沌とした現実社会を照らし、社会的事象の本質や関連をとらえ、その意味や影響を見いだしていくと考えるのである。⁽⁵⁾と述べている。

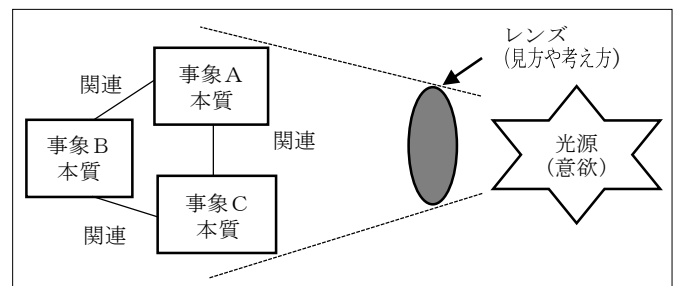


図2 社会的事象を多面的にみるイメージ⁽⁵⁾

片上宗二（2008）は、社会的事象への迫り方について、一面的一方的な迫り方にならないよう注意するべきであるとし、社会的事象は複雑であるため、複眼的な視点を基に捉えさせることが求められると述べている⁽⁶⁾。

これらのことから「多面的」とは、社会的事象やその関連を様々な立場や観点から複眼的に捉えることによって、その事象の本質や関連を見いだすことであると考えられる。

イ 歴史的事象について

松尾正幸（2000）は、生徒が社会科の授業において、観察、理解、解釈、説明するときの対象を社会諸事象とした上で、これをさらに地理的事象、歴史的事象、社会的事象に分けている。そして、「現在、今、ここに存在する社会的事象を、形成過程に注目して、時間的系列の中でとらえ、考察の対象とした

のが歴史的事象である。」⁶⁾と述べ、現在にもみられる組織や制度などといった社会的事象を、過去において、「いつ」「どのように」形成されたかを考察する対象が歴史的事象であるとしている。

また、歴史的事象のもつ特殊性について、過去に生起した人間活動の全てを対象としているため、観察の対象とならないものが多く、そこに歴史的事象を捉えることの困難性が生じるのであるとしている⁷⁾。例えば、前述した「聖武天皇は仏教の力をもって、奈良時代の政治を安定させようとした」という個別的説明的知識は実際に見ることができないため、この事象に関わる資料(史料)や文化財などを通して、時間的系列の中で複眼的にみる必要が生じるのである。

そこで、本研究においては、実際に見ることができない歴史的事象を生徒に捉えさせるためには、その形成過程である時間的系列の中で、その事象を複眼的にみる視点を明確にもたせることが重要になると考える。

ウ 歴史的事象を多面的にみる視点について

「解説」では、歴史的事象を見いだす視点として、「我が国の歴史と関連する世界の歴史を背景に、政治の展開、産業の発達、社会の様子、文化の特色など他の時代との共通点や相違点に着目して各時代の特色を明らかにした上で、我が国の歴史を大きくとらえさせることが学習の中心である」⁷⁾と述べられている。このことについて、竹中伸夫(2010)は、大きな流れを理解するという目標を達成するために教えるべき必要性の高い個々の事象が選抜され、これらを通して理解が目指される各時代の特徴というものは、個々の事象を一般化することによって抽出される概念や法則性であるとしている⁸⁾。この抽象的な概念や法則性を生徒に捉えさせるためにも、様々な立場や観点から複眼的にみることが求められる。

また、「解説」2内容の(3)中世の日本では、「技術面の進歩によって農業や手工業が著しく発達したことや、それに伴って人々の生活が向上したこと、商品流通が活発化したことに気付かせる。」⁸⁾と述べられており、時代の特色を明らかにする視点のうちの「社会の様子」については、その他の視点との関連が強く、その時代全体を網羅したものであるため、明確な視点とはなりにくいと考える。

これらのことから、歴史的事象を多面的にみる視点について、本研究では、政治、経済、国際社会、文化の四つとする。

(3) 歴史的事象を多面的に関連付ける力について

(1)(2)のことから、本研究において、歴史的事象を多面的に関連付ける力とは、政治、経済、国際社会、文化の視点から捉えた一般的説明的知識を根拠として複数の記述的知識を結び付け、対象とする歴史的事象の特色である個別的説明的知識を見いだす力であると定義する。

2 歴史的事象を多面的に関連付ける力を育成するための学習とは

(1) 様々な事象と文化的な事象とをつなぐ学習について

「解説」では、「その時代の文化の特色を表す代表的な事例を選んで取り上げ、文化を担った人々や外国とのかかわりなどに着目し、各時代の文化の特色を考えてとらえさせることが大切である。」⁹⁾と述べられており、文化を多面的な視点に立って考察し、関連付けてその特色を見いだすことが求められている。

阿部猛ら(2002)は、文化を学問や芸術、宗教、道徳や社会生活上の慣習・規範などの領域を指すものと定義した上で、「文化は個人や集団が創り出し、また享受するものである。創り手と、文化財と、それを享受するものの三者の相互関係に配慮しつつ文化の発展を追跡するのであるが、それが生み出された社会のありかたと切り離して論ずるわけにはいかない。」¹⁰⁾と述べている。

これらのことから、文化とは、文化財としてだけでなく、その時代の社会の在り方や特色を背景としてその文化をつくり出し、享受する人間の関係や文化の担い手との関係を捉えることが重要であると考ええる。

このような文化の学習においては、その時代がどのような性格をもった時代であったかという特色につながる視点を、生徒にもたせることが必要となる。そこで、その文化が形成された時代の政治、経済、国際社会の様子を明らかにすることによって、時代を反映した文化の特色を見いだすことができると考える。

こうした文化の学習を成立させるためには、その前提として、生徒が、その時代特有の文化が生まれた背景となる、政治、経済、国際社会に関する記述的知識や一般的説明的知識を捉えておく必要があるため、単元のまとめとして文化の学習を位置付ける。

(2) 様々な事象と文化的な事象とをつなぐマッピングを取り入れた学習について

ア マッピングについて

まとめの学習の場面では、知識を整理する学習方法として、思考の過程を図で表すことで視覚化し、メタ認知を高めることができるマッピングが活用されている。塚田泰彦（2005）は、マッピングについて、語句を線で結んで、知識や考えを拡充・整理する方法であると述べ、直面する大量の情報を再構成することができるとしている。そこで、情報をカテゴリーに分け、そのカテゴリー間の関係を考えながら情報の構造化を図ることができる意味マップを紹介している⁽⁹⁾。福岡敏行（2002）は、子供が外部から取り込んだ情報を、既存の知識体系の中に位置付け、関連付けることができたとき、初めて「分かった」状態になるとしている⁽¹⁰⁾。そこで、関係の深い言葉と概念とを線で結び、概念を上部に、その中に含まれる言葉を下部に配置することで、知識を構造化できるコンセプトマップを紹介している⁽¹¹⁾。

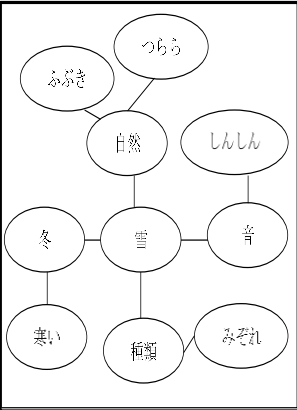


図3 意味マップの例⁽¹²⁾

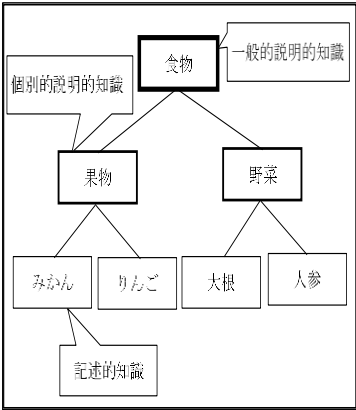


図4 コンセプトマップの例⁽¹³⁾

イ マッピングシートについて

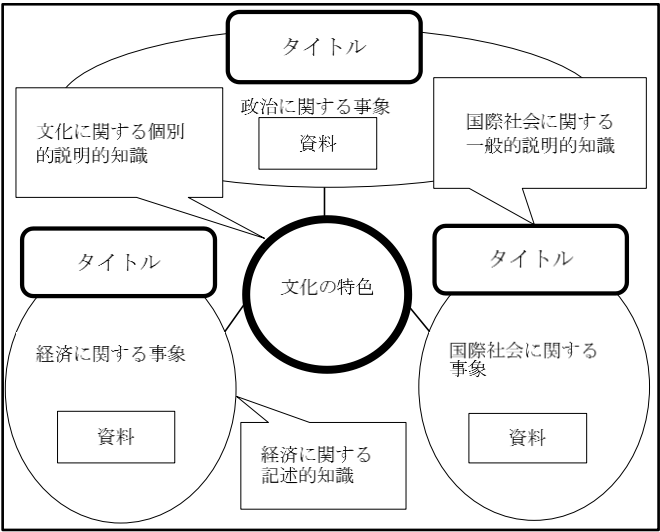


図5 文化を語るマッピングシート

まず、政治、経済、国際社会の視点に立って、様々な事象に関する資料（絵や写真）をカテゴリーに分類させる。次に、分類したカテゴリーごとにタイトルを付けさせることによって、生徒に時代の特徴を説明するための一般的説明的知識を捉えさせる。そして、捉えた一般的説明的知識を用いて、文化に関する具体的な資料を生徒に分析させ、政治や社会などの動向と関連している文化の特徴を説明させる。このように、図5に示す文化を語るマッピングシートを完成させる過程を通して、個別的説明的知識である文化の特徴を生徒自らが多面的に関連付けながら、説明することができるようになると思われる。

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

政治、経済、国際社会の三つの視点から一般的説明的知識を捉えさせ、文化の特徴という個別的説明的知識を見いだす場面において、様々な事象と文化的な事象とをつなぐマッピングを取り入れた学習を行うことによって、歴史的事象を多面的に関連付ける力を育成することができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表1に示す。

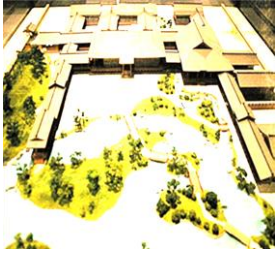
表1 検証の視点と方法	
検証の視点	方法
様々な事象と文化的な事象とを多面的につなぐ力は高まったか。	プレテスト1 ポストテスト1
政治、経済、国際社会の三つの視点から捉えた理論や法則と文化の特徴とを関連付けることができたか。	プレテスト2 ポストテスト2
マッピングを取り入れた学習は、歴史的事象を多面的に関連付ける力の育成に有効であったか。	マッピングシート アンケート

(1) プレテスト及びポストテストについて

ア プレテスト1及びポストテスト1について

プレテスト1及びポストテスト1では、平安時代と鎌倉時代を表す資料を提示し、生徒にその資料と関連があると判断した歴史的事象を表の中から選択させ、選択した理由を記述させる形式で実施する。この表中の歴史的事象は、それぞれ政治、経済、国際社会、文化の視点で資料と関連付けられる事象と関連しない事象の五つを設定した。これは、生徒の様々な事象と文化的な事象とをつなぐ力について調査するものである。ポストテスト1の設問を、図6に示す。

あなたは、下の建物について説明するとき、右の表中の①～⑤の出来事のうち、どれと関連付けて説明しますか。表中の①～⑤から数字で答え、選んだ理由を書いてください。(複数回答可)



寝殿造

『新中学校 歴史 改訂版 日本の歴史と世界』(平成17年検定済) 清水書院 p.51

数字	出来事
①	聖田永年私財法が出されて、荘園を広げた貴族が増える。
②	菅原道真の提案によって、遣唐使が廃止される。
③	平将門の乱をしずめるために、武士が活躍する。
④	清少納言が、かな文字で書かれた『枕草子』をまとめる。
⑤	藤原道長が摂政となって、藤原氏の全盛期をむかえる。

図6 ポストテスト1

イ プレテスト2及びポストテスト2について

プレテスト2及びポストテスト2では、平安時代と鎌倉時代の文化について、教科書の記述を参考にして、レポートにまとめさせる形式で実施する。これは、生徒の一般的説明的知識と個別的説明的知識とを関連付ける力を、記述内容から調査するためのものである。ポストテスト2の設問を、以下に示す。

鎌倉時代の文化について、教科書を参考にしながら、レポートにまとめてください。レポートのまとめ方は、文章でも、表や図でもかまいません。

ポストテスト2

(2) 事前アンケート及び事後アンケートについて

アンケートでは、4段階評定尺度法を用いて、歴史的事象を関連付けて時代の特色や動きを説明する力について、生徒の意識の変容を把握する。また、事後アンケートでは、マッピングを取り入れた学習の有効性に関する生徒の意識を把握するための設問を加えた。

IV 研究授業について

1 研究授業の内容

- 期 間 平成26年7月7日～平成26年7月11日
- 対 象 所属校第2学年(3学級110人)
- 単元名 中世から近世へ
- 目 標
 - ・政治、経済、国際社会のそれぞれの単元で、それぞれの記述的知識を一般的説明的知識にまで高めて捉える視点をつくる。
 - ・政治、経済、国際社会のそれぞれの単元で捉え

た一般的説明的知識から、個別的説明的知識である文化の特色を見いだす。

2 指導計画(全5時間)

時	学習内容
1	・当時の対外関係について、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現する。(国際社会)
2	・楽市・楽座の政策によって、近世社会の基礎がつくられていったことを理解し、その知識を身に付ける。(経済)
3	・太閤検地と刀狩によって、近世社会の基礎がつくられていったことを理解し、その知識を身に付ける。(政治)
4	・政治、経済、国際社会の視点に立って、マッピングで資料をカテゴリーに分類し、そのカテゴリーを表すタイトルを付ける。(1)
5	・政治、経済、国際社会の視点に立って、マッピングで資料をカテゴリーに分類し、そのカテゴリーを表すタイトルを付ける。(2) ・政治、経済、国際社会の三つの視点から、桃山文化の特色を見いだす。

V 研究授業の分析と考察

1 様々な事象と文化的な事象とを多面的につなぐ力は高まったか

図7で示すとおり、生徒が、政治、経済、国際社会に関わる歴史的事象を選択し、かつ選択した理由を正しく記述することができた歴史的事象の総数は23個から63個に増え、約2.7倍増加した。

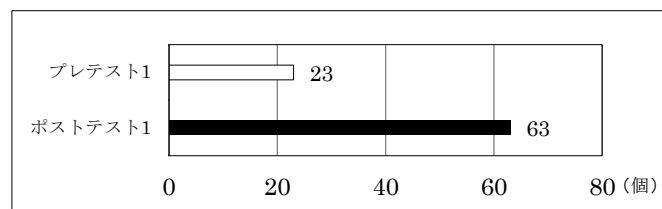


図7 関連性を正しく捉えて選択した歴史的事象の総数

図8は、図7の歴史的事象の総数を、政治、経済、国際社会の三つの視点ごとに分類した結果を示している。ポストテスト1では、いずれの視点においても、生徒が選択した理由を正しく記述することができた歴史的事象の総数は増えている。

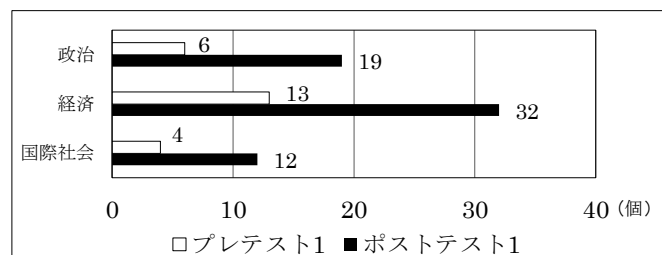


図8 関連性を正しく捉えて選択した歴史的事象の視点ごとの総数

次に、多面的に歴史的事象を関連付けることができた生徒の割合について述べる。図9で示すとおり、無解答であった生徒が、プレテスト1では21.0%であったが、ポストテスト1では2.0%に減っている。その一方で、文化的な資料を、文化の知識と関連付けるのではなく、政治、経済、国際社会のうち、一つもしくは二つの視点と関連付けて説明することができた生徒の割合は、21.0%から55.0%へと増えている。このことは、これまで生徒は、文化を文化の知識とのみつないで捉えていたが、文化が様々な事象と関連していることに気付き、政治、経済、国際社会の知識とつなぐ必要性を意識することができたためであると考えられる。

これらのことから、政治、経済、国際社会の三つの視点と文化的な事象とを多面的に関連付ける力は高まったといえる。

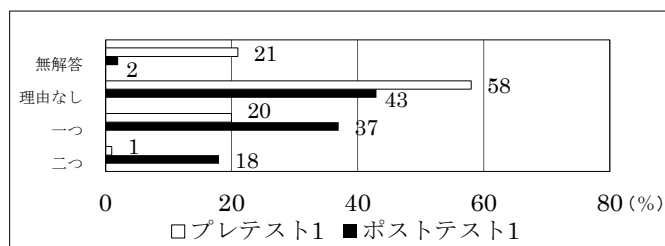


図9 視点と事象とを正しく捉えて選択できた生徒の割合

2 政治、経済、国際社会の三つの視点から捉えた理論や法則と文化の特色とを関連付けることができたか

図10は、プレテスト2及びポストテスト2における生徒記述から、記述的知識、一般的説明的知識、個別的説明的知識のそれぞれの知識を記述した生徒の割合を示したものである。また、図11は、プレテスト2及びポストテスト2における生徒記述から、記述的知識のみでまとめた生徒、記述的知識と一般的説明的知識とを関連付けてまとめた生徒、一般的説明的知識と個別的説明的知識とを関連付けてまとめた生徒の割合を示したものである。特に、一般的説明的知識と個別的説明的知識とを関連付けてまとめた生徒の割合は、13.5%増えている。このことは、単元を通して学習した様々な歴史的事象について、記述的知識同士を関連付けて説明するだけでなく、一般的説明的知識から文化を捉え、その特色を説明する力が高まったためであると考えられる。

これらのことから、政治、経済、国際社会の三つの視点から捉えた理論や法則と文化の特色とを関連付ける力は高まったといえる。

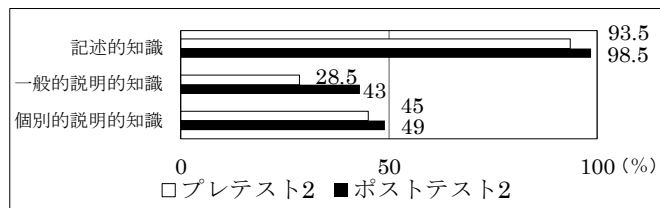


図10 三つの知識について記述した生徒の割合

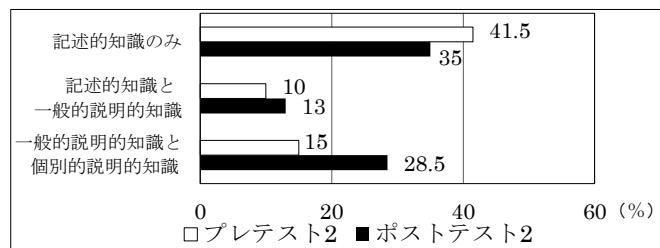


図11 三つの知識の関連がみられた生徒の割合

ポストテスト2における生徒記述からは、鎌倉時代の文化について、「写実的で力強い」「人々のなやみにこたえる仏教の新しい動き」「公家を中心とした文化の上に武士や民衆にも分かりやすい文化」など、記述的知識だけでなく、個別的説明的知識を用いて文化の特色を説明しようとしていたことが分かる。

図12と次ページの図13は、プレテスト2とポストテスト2における生徒aの記述内容である。図12のプレテスト2では、文学作品とその筆者など、平安時代の文化的な事象の説明が中心であり、記述的知識が多くみられた。図13のポストテスト2では、図中のAから、鎌倉時代の政治の視点に立った一般的説明的知識と関連付けて、文化を説明しようとしていることが分かる。また、図中のBからは、鎌倉時代の文化が外国からの影響を受けていることを記述しており、国際社会の視点に立った一般的説明的知識と関連付けて、文化を説明しようとしたものと分析できる。

漢字を簡単にした**かな文字**がつけられた。

↓

かたかなは、漢字の部首などで、ひらがなは漢字の形でつくられた。

かな文字は、日本の言葉を文章に表すのに適していたため、『竹取物語』が書かれるなど、文学が発達した。
ひらがなは、主に女性の間で使われ、紫式部の『源氏物語』や、清少納言の『枕草子』などの作品が生み出された。

男性の服装	女性の服装
束帯といい、唐の服装に比べると、袖口が開いており、湿度の高い日本に適した服装。	色ちがいの衣を重ね着し、十二単とよばれました。

図12 プレテスト2における生徒aの記述内容

仏教

A 戦乱やききんなどの災害が続いたこの時代には、人々のなやみにこたえる仏教の新しい動きがみられた。

- ・法然は、阿弥陀仏の救いをただ信じよと説き、浄土宗を開いた。
- ・法然の弟子の親鸞は、阿弥陀仏を信じ、自分の罪を自覚した悪人こそ救われると説き、浄土真宗を広めた。

↓

これらの新しい仏教は、武士や農民のほか、公家などの間にも広まった。特に、禅宗は、武士の気風にあったため、鎌倉幕府の保護を受けて広まった。

文化

文学では、軍記物がつくられ、中でも『平家物語』は、琵琶法師によって、武士や民衆にも広められた。

公家の間では、叙情的な和歌が好まれ、『新古今和歌集』がまとめられ、時代の変化を見つめた鴨長明の『方丈記』などの随筆が書かれた。

美術では、写実的で力強い彫刻や似絵が盛んになった。

B 建築では、宋の様式を取り入れた寺院がつけられた。

図13 ポストテスト2における生徒aの記述内容
(記号、波線は稿者による加筆)

これらのことから、生徒aの文化をみる視点が変容し、多面的に文化を説明しようとしている様子が分かる。

3 マッピングを取り入れた学習は、歴史的 事象を多面的に関連付ける力の育成に有効 であったか

(1) マッピングシートによる分析

マッピングを取り入れた学習は、次のとおりである。まず、文化の特色につながる資料（絵や写真）を班ごとに配布した。次に、シート上で資料をカテゴリーにまとめさせた。そして、まとめたカテゴリーにタイトルを付けさせた。このタイトルについては、「交流タイム」をもち、各班のマッピングシートを観察し合うことで、それまで気付かなかった視点をもたせる工夫を行った。こうして一般的説明的知識となるタイトルを明確な視点として、生徒に獲得させた。この学習のために、事前の学習においては、政治、経済、国際社会の三つの視点で歴史的事象を考察させた。さらに、ここで獲得した一般的説明的知識と文化的な事象とをつないで、文化の特色を説明させた。以上の活動により、一般的説明的知識から文化に関する個別的説明的知識を見いださせた。

生徒が班ごとに作成した24枚のマッピングシートを分析すると、全ての班が提示した資料を分類して、カテゴリーにまとめることができていた。その中でも、シート上に、政治、経済、国際社会のいずれかの視点に立ってカテゴリーにまとめることができたマッピングシートは17枚確認でき、これは全体の70.8%を占めた。さらに、その17枚のマッピングシ

ートのうち、政治、経済、国際社会の視点に立って、三つのカテゴリーでまとめることができたマッピングシートは7枚で、全体の29.1%であった。この三つのカテゴリーでまとめることができたマッピングシートとタイトルの事例を、図14に示す。

マッピングシートのタイトルには、「太閤検地により、武士が豊かな生活になった」「楽市・楽座により、経済が発達した」「他国から人が来て、文化が伝わった」などの一般的説明的知識がみられた。



図14 マッピングシートとタイトルの事例

(2) アンケートによる分析

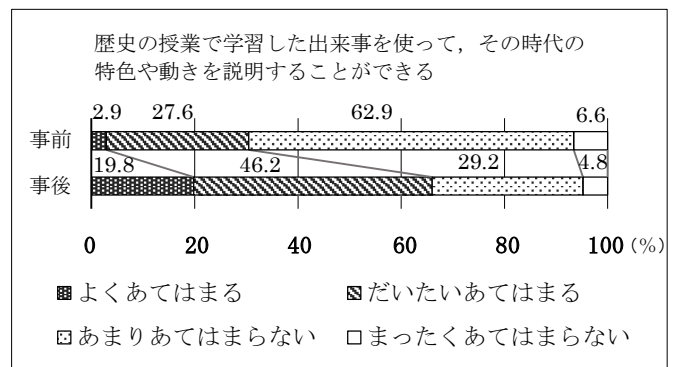


図15 アンケートの結果

図15は、歴史的事象を関連付けて時代の特色や動きを説明する力について質問したアンケート調査の結果である。歴史的事象を関連付けて時代の特色や動きを説明できると肯定的に回答した生徒の割合は、30.5%から66.0%へと大幅に増えた。このことは、マッピングを取り入れた学習によって、生徒が歴史的事象を関連付けて考察することの有効性を実感したためと考えられる。

マッピングを取り入れた学習の有効性について、アンケート調査を実施した106人の生徒のうち、104人の生徒が、肯定的な回答をしている。否定的な回答をした二人は、欠席で授業に参加することができなかった生徒である。マッピングを取り入れた学習の有効性について、生徒記述の一部を次に示す。

・特色や関係を考えるのが難しいときでも、マッピングにまとめることにより、つながりが見付けやすくなった。
・一目で、その時代にどのようなことが起こったのか、その時代がどんな時代だったのかを知ることができる。

生徒記述

上記の記述から、マッピングを取り入れた学習により、生徒は関連付ける技術を身に付けることができ、つながりを見いだすことができるようになったと考えられる。また、思考の過程をマッピングで視覚化したことによって、時代の特色を構造的に捉えることができたものと考えられる。

以上のことから、マッピングを取り入れた学習は、歴史的事象を多面的に関連付ける力の育成に有効であったといえる。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

マッピングを取り入れた学習によって、生徒が単元を通して学習した様々な事象を、政治、経済、国際社会の視点に立って分類し、一般的説明的知識となるタイトルを付けることで、様々な事象と文化的な事象とを多面的に関連付けることができた。したがって、マッピングを取り入れた学習を通して、様々な事象と文化的な事象とをつなぐことは、歴史的事象を多面的に関連付ける力の育成に有効であることが分かった。

2 今後の課題

文化についてレポート形式でまとめさせたポストテスト2において、文章による記述のみで、学習したマッピングの図を活用する生徒がみられなかった。このことは、生徒がマッピングを、関連付ける過程の作業として捉えており、図を表現方法の一つであると認識できなかったのではないと思われる。思考の過程を図として視覚化できるマッピングの特徴から考え、思考と表現の一連の過程とするためにも、マッピングのさらなる有効な活用について、工夫と改善を図る必要がある。

【注】

- (1) 森分孝治 (1984) :『現代社会科授業理論』明治図書 p. 112に詳しい。
- (2) 森分孝治 (1984) : 前掲書 p. 70に詳しい。
- (3) 森分孝治 (1984) : 前掲書 pp. 59-64に詳しい。
- (4) 大杉昭英 (2000) :『新中学校教育課程講座 社会』ぎょうせい p. 166に詳しい。
- (5) 大杉昭英 (平成12年) :「各教科等の改善／充実の視点 公民 『政治・経済』の改善 (4)」『中等教育資料 平成12年5月号』大日本図書 p. 47に詳しい。
- (6) 片上宗二 (2008) :『小学校新学習指導要領の展開 社会科編』明治図書 p. 25に詳しい。
- (7) 松尾正幸 (2000) :『社会科 重要語句の基礎知識』明治図書 p. 236に詳しい。
- (8) 竹中伸夫 (2010) :『中学校社会科教育』学術図書 p. 113に詳しい。
- (9) 塚田泰彦 (2005) :『国語教育のマッピング 個人と共同の学びを支援する』教育出版 pp. 8-14に詳しい。
- (10) 福岡敏行 (2002) :『コンセプトマップ活用ガイド』東洋館出版 pp. 22-23に詳しい。
- (11) 福岡敏行 (2002) : 前掲書 p. 28に詳しい。
- (12) 塚田泰彦 (2005) : 前掲書 p. 13に詳しい。
- (13) 福岡敏行 (2002) : 前掲書 p. 29に詳しい。

【引用文献】

- 1) 中央教育審議会 (平成20年) :『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)』 p. 79
- 2) 文部科学省 (平成20年) :『中学校学習指導要領解説社会編』日本文教出版 p. 69
- 3) 文部科学省 (平成20年) : 前掲書 p. 67
- 4) 文部科学省 (平成20年) : 前掲書 p. 17
- 5) 大杉昭英 (2000) :『新中学校教育課程講座 社会』ぎょうせい p. 164
- 6) 松尾正幸 (2000) :『社会科 重要語句の基礎知識』明治図書 p. 236
- 7) 文部科学省 (平成20年) : 前掲書 p. 67
- 8) 文部科学省 (平成20年) : 前掲書 p. 77
- 9) 文部科学省 (平成20年) : 前掲書 p. 89
- 10) 阿部猛・西垣晴次 (2002) :『日本文化史ハンドブック』東京堂出版 pp. 1-2

【参考文献】

- 岩田一彦 (2001) :『社会科固有の授業理論30の提言 総合的学習との関係を明確にする視点』明治図書
尾藤正英 (2000) :『日本文化の歴史』岩波書店